時の流れにたたずむ人物をテーマに描いている門屋さん

釧新郷土芸術賞に輝く

受賞者の横顔

□上□

財団法人釧新教育芸術振興基金（春日井茂理事長）は2008年度第37回「釧新郷土芸術賞」の受賞者を決定した。同芸術賞は、今後さらに活躍が期待される地元芸術家に贈られており、今年度の受賞者はいずれも釧路市在住で、画家の門屋武史さん(37)、ピアニストの松原俊恵さん(41)、平面造形作家の阿部啓明さん(40)の3人。受賞者の横顔を紹介する。

画家　門屋　武史さん（37）（釧路市）

終わりない厳しい世界

幻想的な具象画描き続ける

独学で古典勉強

絵が好きで各地の美術館で絵を見ているうちに描きたいと思うようになり、1997年から絵画の制作を始めた。ラファエロやダビンチなどのルネッサンス期の絵画が特に好きで、絵画の研究書を海外から取り寄せながら、独学で古典を勉強。「時の流れにたたずむ人物」をテーマに、幻想的な具象画を描き続けている。

釧美展では99年に釧路市賞、その後も佳作賞や会友賞を受賞し、2002年に会員推挙。全道展では01年に初出品で初入選以来毎年入選し、04年に会友推挙。また主体美術協会主催の全国公募展「主体展」では、03年に初出品で佳作作家賞を受賞して以来3年連続受賞し、05年に会員に推挙された。「自分でも驚くほど賞が取れた」と振り返る。

5年ほど前から本格的にプロとして活動しており、「終わりのない厳しい世界。常に頭の中でイメージを追い続け、そのイメージをいかに表現するかが、非常に大事な仕事だ」と最近特に感じている。「数日間描かないと腕が落ちる」とほぼ毎日、少しでも時間があればキャンバスに向かっている。

活動の幅広げて

「ほかの人の絵と並べてみると、自分の絵が客観的に見ることができ、また周りの反応もよく分かり、刺激になる」ことから、多くの人の目に触れるよう「いろいろな展覧会に出品して、今後少しずつ活動の幅を広げていきたい」と願っている。

今回の受賞について「郷土の人に認められたというのがすごくうれしく、光栄に思っている。釧路の画家として、これからも地道に活動を続けていきたい」と話している。

（黒田文夫）